「食卓のインタバル」制作について（色彩、テーマ、素材の関係性）

丸山 喬平
服飾芸術科

はじめに

展示「食卓のインタバル」は映像作品、立体作品、展示空間内での食事体験、ドローイング展示の、大きく分けて 4 つの要素で成り立っている。この研究年報にて扱うのは立体作品、食事体験、ドローイングについてである。映像作品は、感染拡大の社会状況を踏まえ、今後の社会の中でのコミュニケーションのありようを問うた作品となっているが、時間等諸事情から作品についての詳細をまとめることが困難であったため、記述を割愛する。

今回の展示は共同での展示という、互いの意見を尊重しあい、かつ作品ごとに統一のテーマを共有し、個人では成しえないであろう新たなイメージを生み出す試みを行っている面があり、作品の中で互いに、自分のイメージと異なるイメージが生じても、作品の方向性が大きくぶれないと互いが判断すればそれを取り入れていく形をとった。私の中での作品のこだわりと磐井氏の中での作品のこだわりを完全に統一させているわけではない。私自身制作中に作品について完全な言語化をするのが不得手であるのだが、展示が終わってあとから「こういうことではないか」と、頭の中でつながることがあり、今回は「食卓のインタバル」の展示の私の中での在り様を残しておきたいという欲求もあり、研究年報として残すこととする。が、先に書いた通り、この展示は共同での展示であるので、今回の研究年報にて文章化されたものが作品のすべてではないことをはじめに断っておきたい。しかし、作品のコンセプトの立ち上げの過程、実制作過程を極力客観的な視点で記録として残すことは、反省と展開につながり、新たな、意義あるイメージを作り出す力につながると考える。あくまで次の意義ある活力のきっかけとなることを願って、この文章を残したい。

企画の立ち上げについて

展示会場である「元映画館」は、約30年前に閉館した映画館を株式会社デリシャスカンパニーがリノベーションしたオルタナティブスペースである。

株式会社デリシャスカンパニーは東京芸術大学出身の建築家、デザイナー、アーティストがメインスタッフとして活動しており、そのスタッフの一人である磐井賢治氏と私とは同じ東京芸術大学彫刻科を卒業、ともに展示を企画したりするなどもしていた。そういった活動を共にする中で、「元映画館」立ち上げのためのクラウドファンディング等を行っているという話を聞き、わずかながら立ち上げに協力させていただく中で、立ち上げの考え方や過程の面白みを聞きながら、この会場で展示を行いたいというイメージが生まれていった。

この「元映画館」は、かつて映画館として使用されるために設置された巨大なスクリーン、通常映画館にはあまり作られない天窓、映写室をリノベーションしたバーなど、ユニークな造りの個所が多く存在するスペースである。それぞれの部分の制作のきっかけを聞いている中で、利便性の理由ではなく気持ちを盛り上げるために空けたという天窓に魅力を感じ、作品と天窓に何かしら関係性を持たせた展示を行いたいということで、展示の企画を持ち込んだ。この時点では個展としての企画であったが、デリシャスカンパニーのスタッフである磐井賢治氏に相談した際、2 人での共同展示でスクリーンを使用し、映像作品も合わせて展示するのもどうかなどの案が上がった。2021年に岡本太郎美術館にて展示した「幸について」を制作した際に作り切れなかった感覚、ある程度のサイズの作品、例として等身人体サイズの立体を複数関係させるような規模の作品の製作を

完全に個人で行うことに対しての疑問もあったのもあり、共同展示を行うことに決定し、動き始めることとなった。

2人で一つの作品を作るということで、私が初めに持ち込んだ展示の企画を下げ、話し合いやドローイングのやり取りから、2人の共通項や、今現在社会の中で生活していて感じたり、思い浮かぶイメージを探る中で、私は人体制作から複数、集団の人の営みに目が行き始めており、磐井氏は日常的な既製品をマテリアルとし、「人」の骨肉とした人体的な要素の抽出から、両者の類似物としての彫刻表現を試みるなど、身体に関するテーマを扱っているのと、作品制作以外の活動として料理や酒関係への関心もあることから、食の風景をテーマとした展示を行うことに決定した。

「食卓のインタバル」という展示名について

「展覧会について」プレスより…

食卓という空間がある。食材が運ばれ、その周りを人が囲む。食卓という物質性を介した距離感（インタバル）の中で、「地位」や「信仰」「愛情」「文化」などの様々な関係性を生んでいた。しかしその距離感は、緊張状態を伴い現在急速に変化しつつある。この緊張状態は、果たして何を失い何を生むのだろうか。両名の彫刻表現からなる身体的尺度によって、この「食卓のインタバル」の普遍的なあり方が露わになればと願う。

食の風景をテーマとするにあたり、2人の共通点を探ることのほかに、コロナ禍において、ソーシャルディスタンスという言葉に代表されるような、人同士の距離感に対する新しい習慣が生まれ始めていたのも大きい。

コロナウイルス感染者の増加に伴い、展示期間も含め2021年は緊急事態宣言の発令下の期間が長い年であった。飲食店の営業時間や酒類の提供が控えられ、宴会、飲み会、会食が激減し、隣の人との間には「3密」を避けるため身体の距離を取ることが求められるようになった。あらゆる生活習慣が変わる中で、家族の団らんや親しいものと食卓を囲む風景が日常となる日が戻るのか、この状況、風景の変化はコロナ禍に入って視覚的にも特に大きく変わったものであり、磐井、丸山それぞれの、環境に対する見方や感じ方を視覚化できればこの状況に対し意義ある展示ができるのではないかという考えに至った。「インタバル」という言葉は、「ディスタンス」と似た意味合いの言葉の「インターバル」からきており、物質的な間隔の意味合いも強めることができればという意味もある。

モチーフの決定と分担

以下の内容は私自身の思い入れの意味合いが強い。

コロナ禍において、飲食店等の営業時間の変更のほか、様々な変化が生じたが、緊急事態宣言下で学校に登校することができないなどの影響もあり給食や牛乳の消費が低く、余ってしまうという事態も起こっていた。給食などは生徒の学校生活、健康のために必要な物ではあるが、食卓の上に並ぶものには、場を盛り上げるためには不要な、過剰な盛り付けもなされることがある。それは人間の精神状態、エゴの度合いが強く反映されることが多い。宴会や飲み会が行われなくなったのであれば、本来その食卓上に豪華な食材として並ぶはずであったが、廃棄されたもの（加工された動植物）もあるのではないか。それらの存在に対する鎮魂的な意識も生じた。飲み会や宴会などには元をたどれば祭りや呪術的目的、信仰心などから生じているものもあり、強制的に参加を求められる場合もあるだろう。合理性の点からいうと不要のようにも感じる場面はあるだろうし、そういった場面に不快感を感じる人間がいるのもまた事実である。人同士の付き合いのすべてを肯定することにも違和感がある。実際、リモートワークの推奨を始めとする、新しい勤務形態や人付き合いの形は、新たな選択肢として有効であるものもある。

食卓上に並ぶ装飾性も帯びた食材には、人間同士の関係性の重要性や、華やかでなくてはならないという思い込みのようなものにも似た虚像性も感じられるのである。今回の展示にて、食卓上のモチーフには、普遍的な捧げもの、供物のような意味を持たせたいと考え、世界の宗教の中で何かしらの象徴とされている動物、食材や、現代の日本にて食すこと

はあまり無くとも、食材に今ほど恵まれていない時代、こんな見慣れぬものも食べていたというような、華やかさ、崇高さ、貧相さ、価値観のハレーションを一瞬感じさせるようなモチーフを選んでいった。

しかし、人間がどのような思い入れで食材を揃えたとしても、食材自体は既に生命活動を絶たれており、意思はない。あくまで食卓と向き合う人間が、食材を見たときに、それに対しそれぞれどのような思い込み、味わい方をするのかが重要なのだという意味で、食材の立体的造形は行うが、美醜、見え方を大きく左右する着彩は全て何にも染められていない白として見せることとした。

使用素材について

選択肢としては実際の生の素材を揃えるのも考えたが、衛生面など現実的な問題も考え、加工面、重量などの都合から主に垂木、ウレタンフォームと紙粘土を主な素材として使用している。他には、互いの制作環境にて手に入るものは幅広く使用したが、テラコッタや酒瓶なども使用した。

今回の展示では、立体作品の中に椅子を２つ設け、そこにて食事を行うことが可能となっている形をとった。食事のメニュー考案、調理を担当したのは磐井である。

緊急事態宣言下での展示となっていることも考慮し、食事の提供は予約制とし、展示のコンセプトと合わせ、作品中の椅子の位置は食材の山をまたぐ形で配置され、食事を行う鑑賞者は強制的に距離を取る形とした。作品が邪魔で互いの顔も見えず、会話をするには不憫な距離感でありながら、作品中での食事をとることで、互いのつながりは保持されるという奇妙な関係性のありようとなる。

メニューは磐井氏が自身の母親から聞いたというおでんの作り方を再現し考案されたもので、地方で一人暮らしのため普段は会うことなく過ごしている母親との関係性、心の中でのつながりの重要性のようなもの、精神性が込められる形となっている。

反響と反省点

Instagram での告知を会期中も行ったところ、来

作品の中での食事体験について

場者ののSNS をきっかけに新たな来場者に来ていただいたということがあり、改めて告知やSNS 利用の重要性をかんじた。展示の方向性を考える際にやりとりしたドローイングを販売し、購入していただくこともできた。しかし立体作品に関しては、食卓上のものを別別で購入可能の形を取っても売れることがなく、販売を狙っての展示ではなかったとはいえ客観的な見方はする必要があると感じた。

最後に、展示を快く認めていただいた元映画の方々、ご来場の皆様含め展示に関わってくださった方々、共に展示を最後までやり切ってくれた磐井賢志氏に、心より御礼申し上げます。